『海国図志』と吉田松陰
ー幕末における西洋事情の受容について

阿　川　修　三

1　はじめに

『海国図志』は中国初の本格的な世界地理書である。ところが、この書物は撰著者魏源（1794～1856）の祖国である中国より、日本で知識人に広く読まれて、日本人の対外認識に大きな影響を与えたと言われている。『海国図志』の読者は、大名では島津斉彬、幕閣では川路聖謨、思想家では佐久間象山、横井小楠、橋本左内、吉田松陰、尊皇攘夷の志士頼三樹三郎というように、幕末を代表する人物を網羅するとともに、更に地方の素封家(1)、ごく普通の知識人の間にも広汎に存在していたのである。

本稿ではその読者の中で、思想家、兵学者であり尊皇攘夷主義者としても知られる吉田松陰（1830～1859）を取り上げる(2)。そして松陰がどのように『海国図志』を読み、それが彼の対外認識にどのように影響を与えたか、即ち松陰の『海国図志』受容を考察する。その場合、西洋砲術の権威で、その師でもある洋学者佐久間象山（1811～1859）(3)との関係を通じて、幕末期における対外認識に『海国図志』が果たした役割を考察していきたい。

2　『海国図志』と幕末日本の対外認識

まず、これから論を進める上で必要なので、『海国図志』の書物としての性格について若干述べたい。『海国図志』は清末の改革思想家魏源によって撰述された世界地理の書である。撰述というのは、彼が書いたのは『海国図志』のごく僅かな部分であり、それ以外は、林則徐（1785～1850）から完成を託された『四洲志（Hugh Murray〔慕瑞〕の『The Encyclopedia of Geography〔世界地理大全〕1834年』を漢文に抄訳させたもの)』や林則徐から受けついだ英字新聞の翻訳原稿等(4)を藍本として、それに漢訳洋書や正史、明以来の島志などの一部を加えたからである。

『海国図志』が従来の中国の世界地理書と違うのは、何と言っても記述の正確さであった。魏源がその原叙で「西洋人を以て西洋を譚ず」と言うように、

この書物の西洋の記述は多くの場合、先に挙げた『四洲志』や西洋人が漢文で著した漢訳洋書に拠っており、従来の中国の地理書に比べその内容に根拠があり格段に正確であったのである。中国で最初の本格的世界地理書と言われる所以でもある。また、『海国図志』は単に地理知識を提供するだけではなく、西洋の歴史、その軍事技術、その文明の利器（火輪船〔蒸気船〕、火輪車〔汽車〕）などの西洋事情を紹介し、併せてその西洋に軍事的に対抗する方法などをも述べた書物である。そもそも、魏源が『海国図志』を撰述した動機は「夷の長技を師とし、夷を制せん（西洋の長所〔大砲、艦船〕を学び、それによって西洋に対抗しようとする）」（『海国図志』「原叙」〔『海国図志』第一冊第10頁　岳麓書社　2011年）がためであり、その撰述の契機は言うまでもなくアヘン戦争の敗北であった。

当時日本では、アヘン戦争に関する情報が長崎に入港するオランダ（『和蘭風説書』）、清国の貿易船（『唐船風説書』）によって逐次もたらされ、また琉球から薩摩経由で比較的早く伝わり[5]、既に十九世紀初頭以来周辺の海域で異国（西洋）船が頻繁に出没していたこともあり、当時鎖国をしていた日本も中国の二の舞になるではないかと危機感が高まっていた。その中で、アヘン戦争に関する書物、例えば斎藤竹堂（1815～1852）の『鴉片始末』、塩谷世弘（1809～1867）がアヘン戦争の詳細を知るべくその中国側資料を集め編集した、稿本『阿芙蓉彙聞』などが、写本で流通し多くの知識人に読まれた[6]。吉田松陰も兵学修行のため平戸・長崎に赴き、その折、平戸藩家老葉山佐内から『阿芙蓉彙聞』を借覧している[7]。知識人はアヘン戦争に大変衝撃を受けた。その衝撃は大国清国を破った英夷（英国）の圧倒的な軍事力に起因するのみならず、それ以上に英夷がアヘンという毒物を清国に売るために戦争を仕掛けたこと、夷狄の大義がなくとも、利の為ならば手段を選ばないということに大いに衝撃を受けたのである[8]。夷狄が次に狙うのは日本ではないかと言う情報も入り、知識人の間で対外的な危機感はいやが上にも高まり、夷狄（欧米列強）に対抗するために、夷情（外国事情）を求めたのである。当時の知識人はまずアヘン戦争の真相を知りたかったのであり、その真相を知り、西夷の圧倒的軍事力を確認し、それに危機感を抱き、かつ西夷に対抗する方途を求め、これは海防論として現れるのであった。そのような状況にある日本では、アヘン戦争敗北を契機とし西洋列強の軍事力に対抗しようとして撰述された、『海国図志』は当然ながら大いに歓迎されたのである。

当時『海国図志』は日本に将来された部数も少なく、更に過半が幕府関係者乃至幕府機関に所蔵されており[9]、読者は多くの場合その和刻本や和解本で

読んでいたのである。なお、和刻本は七種類、和解本は十四種類である。[10]

3　兵学者吉田松陰と佐久間象山の影響

本稿では吉田松陰の夷情の受容、特に『海国図志』について考察するが、その上でまず松陰が兵学者である点を念頭に置かなければならない。思想家吉田松陰の原点も兵学にあると言えるのである。兵学という学問は、そもそも勝敗という結果が直ちに出る学問であり、空理空論では成り立たない実践的学問である。兵学者は主観を排し、事実を直視して敵を分析し、勝利を導き出さなければならない。また当時の兵学者の直面する最大の課題は如何に日本を欧米列強の侵略から守るかと言うことであった。松陰は兵学者としてこの課題を真正面に受け止めて、それと格闘したのであり、思想家松陰もその中で形成されたと言ってよい。

①　兵学家吉田松陰

吉田松陰は天保元（1830）年長州藩士杉百合之介の次男として生まれたが、天保五（1834）年、数え年六歳で父の弟に当たる長州藩兵学師範吉田大介の養子となり、翌年養父の死により家督を継ぐこととなる。以後家学である山鹿流軍学を中心に学び、幼少で家督を継いだため、何人かの後見役に訓育され、兵学者として成長していく。その後見役のうち最も影響を受けたのは含章斎山田宇右衛門である。弘化二（1845）年、宇右衛門は松陰に、「近時歐夷日に盛にして、東洋を侵蝕す。印度先づ其の毒を蒙り、而して満清継いて其の辱を受く。余焔未だ熄まず、琉球に朶頤し突いて崎嶇に来る。天下の人士、方に心を痛め首を疾み、防禦を以て急務と為す、殊て知らず夷の東侵する、…」（「含章斎山田先生に与ふる書」安政五年七月二十二日『戊午幽室文稿』〔『普及版吉田松陰全集（岩波書店、1939年　以下『全集』と略称）』、第五巻第216頁〕）と教えられ、「余是に於て憤を発し食を忘れ、辺防を講究す」（『講孟余話』尽心篇下篇第35章、『全集』第三巻第496頁）、つまり松陰は兵学者の使命として欧夷（欧米列強）の侵略に対抗し如何にして日本を守るかを考究することになる。この時、宇右衛門は松陰に刊行されたばかりの『坤輿図識』を与え、夷情を知ることの重要性を説いた。松陰は西洋兵法にも興味を示し、他流派の門を叩いたが、これも一流一派に閉塞すべきではないと説く宇右衛門の影響である[11]。

嘉永元（1848）年、松陰は全ての家学後見人を解かれて、独立して兵学師範となる。翌嘉永二（1849）年二月、松陰が藩主に上書した「水陸戦略」では、まだ西洋の大砲、軍艦が優位なることを認めず、和流砲術の優位性を主張して

いる。その翌嘉永三（1850）年八月から十二月まで、兵学修行のために、平戸、長崎に遊学し、併せて佐賀、熊本に旅行した。この遊学の目的は本来家学である山鹿流兵学を平戸にいた宗家山鹿万介の下で学ぶことであったが、松陰は『聖武記』、『阿芙蓉彙聞』など夷情の書を読み、長崎ではオランダ船に乗り、パンを食べるなどの西洋体験をもし、また西洋砲術書『百幾撤私（ペキサンス）』、『台場電覧』、『砲台概論』を読み、洋式砲術家の高島浅五郎を尋ねるなど西洋兵学の一端も学んだ(12)。この遊学は結果として松陰に夷情への理解を深め、その兵学の幅をも広めることになったのである。

② 西洋砲術家佐久間象山の影響

松陰の兵学に決定的影響を与えたのは、佐久間象山である。松陰は嘉永四年四月兵学修行のため江戸に出て遊学する。その最大の目的は家学山鹿流のもう一つの宗家山鹿素水に従学することであった。しかし、幾多の高名な学者の門を叩くうちに、松陰はその年の七月に西洋兵法者、特に洋式砲術家として名高い佐久間象山に入門する。象山は当代随一の西洋兵学者であり、特にその西洋砲術の腕前は自ら仕える松代藩で実際に大砲を試作・試射し、佐賀藩、薩摩藩、長州藩などの雄藩から大砲の設計図やその作成の依頼があるほどであった(13)。抑も象山は単なる兵学者ではなく、本来朱子学者であったが、アヘン戦争を契機とし欧米列強の侵略から日本を救わんが為に西洋兵学を志した、使命感を持った人物であった。象山はこの当時「東洋道徳、西洋芸術（朱子学を道徳の根底とし、学問は西洋の科学技術に拠る）」（『省譯録』）を唱え、華夷的秩序観（中華思想）を打破し、西洋の侵略に抗するため、西洋の科学技術導入を目指し奮闘していた。

松陰は江戸の遊学中、当代の大儒安積艮斎、家学の宗家山鹿素水などの高名な学者の門を叩くが、実際に従学して失望することも多かった(14)。しかし、その中で、ただ一人、佐久間象山だけは「真田侯藩中佐久間修理（象山）と申す人頗る豪傑卓異の人に御座候。元来一斎門にて経学は艮斎よりもよかりし由、古賀謹一郎いへり。…今は砲術家に成り候処、其の入塾生砲術の為めに入れ候ものにても必ず経学をさせ、経学の為めに入れ候ものにても必ず砲術をさせ候様仕掛けに御座候。西洋学も大分出来候由。会日ありて原書の講釈いたし申し候。一遍やらきき申し候」（叔父玉木文之進宛　嘉永四年十月二十三日　『全集』第八巻第98頁）と言い、「佐久間象山は当今の豪傑、都下一人に御座候。朱に交はれば赤の説、未だ其の何に因るを知らざれども、慷慨気節、学問あり、識見あり」（兄杉梅太郎宛　嘉永六年九月十五日　『全集』第八巻第215頁）と言う。植手通

有氏に拠れば「象山のうちには、主知的・観念的・論理的な朱子学の精神とならんで、これと交錯し、時には対立しつつ、実践的・非合理的ないわば武士精神が存在していた」(『日本思想大系第五十五巻』〔岩波書店、1971年〕「解説」第662頁)が、松陰はそのような精神に支えられた象山の学問、即ち西洋兵学乃至西洋砲術、その見識、西洋列強の侵略に対して日本を救おうとした慷慨気節に全幅の信頼を置いていたようである。このような、松陰の師象山に対する尊敬の念は松陰が刑死する直前に出した「象山先生に与ふる書」(「己未文稿」『全集』第六巻第271頁)にも「遥かに欽ひ遠く慕ふ、鄙懐何ぞ止まん。…ここに於て先生報国の志益々殷なるの状を審かにするを得たり」とあるように、生涯変わることがなかった。一方象山からも、松陰は同門の小林虎二郎とともに「象門の二虎」と称され、その人格、才能において将来を大いに嘱望されていた。

以後松陰は象山の教えを受け、その影響の下、西洋兵学を学ぶ。松陰は既に後期水戸学の影響を受け、日本の伝統を絶対視する国粋的傾向もあったが、事、軍事に関しては、事実を直視する兵学者であり、西夷(西洋)の武器である、大砲、軍艦を日本も備えなければ、西夷には勝てないことを確信するに至る。

松陰のこのような考えは、まず、最初のペリー来航に衝撃を受けて著した、藩主への上書「将及私言」(嘉永六年八月)の中で次のように見える。

> 砲銃　本邦の砲術も強ひて是れを卻くるには非ざれども、其の術多くは技芸家の言にして、未だ兵家の論定を経ざるものなれば、一概に用ひ難し。西洋法に至りては、常に是れを実戦に施す故に、一門砲一口銃の論、其の精妙を極むるのみならず、戦をなすの大術に至りて、大いに然らざること能はざるものなり。故に大砲小銃共に西洋の器械節制に倣ひ、日々操演をなすべし。
>
> 船艦　船艦の制、西洋に倣ふの便なることは、諸家の説、累々なり。…然れども終に未だ公然として其の説を用ふる者あらず。或は其の志ありて未だ果さず、或は果すも公然ならず。…或は蘭人に命じて艦を貢せしめ、又は工匠に命じて新たに製造し、並びに江戸及び各藩にて盛んに水操を興すことを許允ある如くあり度きことと、…。(「将及私言」、『全集』第一巻第303頁～305頁)

即ち、外夷と戦うには西洋の大砲、小銃や艦船が不可欠であることを述べているのである。

更に、松陰はこれ以後も同様の主張をしている。

> 洋夷と戦ふの陣法、弟に定論御座候。今相対し談論することを得ず、残憾至極に存じ奉り候。孰れの道、大砲小銃西洋法ならでは迚も勝て申さず、…。

（兄杉梅太郎宛　嘉永六年八月十五日、『全集』第八巻第199頁）

軍艦の一事最早誰れも異議なき事とのみ相考へ居り候処、先日阿兄の書中にて相考へ候へば矢張り古来の有懸りにて事足るやの趣当惑仕り候。差当り相州御備所に致し候ても、軍艦之れなくてはほんとの御手当は出来申す間布く候。何となれば浦賀の海関を越させまじと致しても、当正月の如く火輪船にて軍艦を引こじり走り込み候時は小舟にてささへに出で候迚、手も足も届く事に御座なく候。もし軍艦を以て三崎・浦賀等に備へ置き候はば、夷も跡を取切られん事を恐れ、軽々敷く内には得乗入れ申す間布く、是れ一。（叔父玉木文之進宛　嘉永七年十二月十八日、『全集』第八巻第347頁）

以上のように、松陰は当時既に後期水戸学の影響を受け攘夷論者者ではあった[15]が、兵学者としては佐久間象山の影響を受け、西洋兵学、西洋の武器の優位性を冷静に認めていたのである。勿論日本の古来の武器についてその存在を否定している訳ではなく、「天下有志の人には、迚も海外の情態を知らざれば戦は出来ず、又大砲小銃とも西洋の節制器械を取らざるべからずと通論に御座候。さりながら本邦刀槍の利はどこまでも万国卓越たること、是れ亦通論なり（兄杉梅太郎宛　嘉永六年八月十五日〔『全集』第八巻第197頁〕）」と述べている。

また、松陰はアメリカの砲艦外交による日本の開国を屈辱と考え、「攘夷」を主張したけれども、決して単なる鎖国主義者ではない。これも佐久間象山の影響が大である。

国家の大計を以て之れを言はんに、雄略を振ひ四夷を馭せんと欲せば、航海通市に非ざれば何を以て為さんや。若し乃ち封関鎖国、座して以て敵を待たば、勢屈し力縮みて、亡びずんば何をか待たん。且つ神后の韓を平げ、貢額を定め、官府を置きたまふや、時に乃ち航海あり。…寛永十三年乃ち尽く之れを禁絶す。然らば則ち航海通市は固より雄略の資にして祖宗の遺法なり、鎖国は固より苟偸の計にして末世の弊政なり。（「対策一通」安政五年四月中旬〔『全集』第五巻第137頁）

鎖国の説は一時は無事に候へども、宴安姑息の徒の喜ぶ所にして、始終遠大の御大計に御座なく候。一国に居附き候と天下に跋渉仕るとは人の智愚労逸、近く日本内にても懸絶致し候事、況や四海に於てをや。何卒大艦打造、公卿より列侯以下、万国航海仕り、智見を開き、富国強兵の大策相立ち候様仕り度き事に御座候。…外国の事情を知らずして徒らに海岸を守り貧窮に困しみ候は、誠に失策に之れあるべく、英吉利・仏蘭西などの小国にてさへ、万里の遠海へ亙り人を制し候は、皆々航海の益に御座候。此の所早く御着眼

之れなく候ては覚束なく存じ奉り候事。(「続愚論」安政五年五月二十八日〔『全集』第五巻第161頁～第162頁〕)

とは言え、松陰は和親条約はやむを得ず認めても、修好通商条約は勅許を得ていない点で問題であるだけではなく、それ以上にその締結により日本が侵略に曝されることに大いに危惧を抱き、攘夷を唱えたのである。

松陰は象山から西洋兵法を学ぶが、象山の洋学（蘭学）についてはほぼ学ぶことができなかった。これは入門して「三年間、東奔西走、事故雑出」、即ち東北行きの脱藩騒動、その後の謹慎蟄居生活、許されて江戸遊学を果たすも、海外密航未遂事件で囚われの身となったからであり、「矩方日々蘭学を修め候へども、中々其の功も墓行き申さず」（叔父玉木文之進宛　嘉永六年九月十日、『全集』第八巻、第211頁）と嘆き、じっくりとオランダ語の学習をし、原書を読む暇がなかったのである。松陰はそのことを後悔して、後に友人に「西洋の学は文目に慣れず、語口に習はず、吾れの之を修むること、戛々乎として其れ難きかな。…余嘗て東遊せしとき、亦た洋学を修むるの志あり、良師友を得てここに居りき。而るに三年の間、東奔西走、事故雑出し、遂に業を成す能はず。今は則ち囹圄に幽囚せられ、力を書に一にするを得れど、良師友あることなければ、則ち洋学の念已に絶ゆ。(「(白井）古助の江戸に遊学するを送るの序」安政二年八月〔「野山獄文稿」『全集』第四巻第62頁〕）と告白しているのである。

4　吉田松陰と『海国図志』―西洋事情の受容

松陰は後見人山田宇右衛門の教えもあり、ことあるごとに夷情（西洋事情）摂取に務め、長崎遊学時にも『聖武記』の語「夫れ外夷を制馭せんとせば必ず先づ夷情を洞せよ」を『西遊日記』に記すほどであった。その手始めは、地理学（輿地学）の受容である。地理学については、松陰が「扨て輿地の学、後進生御誘掖専務と存じ奉り候。坤輿図識一部にても精読すれば其の益少なからず」（妻木士保宛、安政二（1855）年三月二十七日〔『全集』第八巻、第418頁〕）と言い、その重要性を主張している。この『坤輿図識』は箕作省吾（箕作阮甫の嫡養子、地理学者〔1821～1847〕）が著した、オランダの地理書に基づいて書かれた正確な地理書[16]で、正五巻三冊、補四巻四冊（(弘化二〔1845〕年～四〔1847〕）の世界地理書であり、幕末に大いに読まれた。この書物は既に述べたように十五の時に松陰も後見人山田宇右衛門から贈られており、松陰にとつて多分最初の輿地書であり、以後も読んでいたようである。

松陰は既に述べたように西洋事情を学ぶために諸書を読んだが、その中で松

陰の西洋事情受容に特に貢献したのが、『聖武記』、『海国図志』の二書であり、共に清末の魏源の書物である。松陰はいずれも和刻本で読んでいる。中国での刊行年はどちらも1842年であるが、和刻本刊行は『聖武記』の方が早い。先ず、松陰が『聖武記』とどのように出会い、読んだかを次に見ていきたい。

①『聖武記』との出会い

『海国図志』に先立ち、同じ魏源の著書『聖武記』が弘化（1844）元年、日本に将来され、嘉永三（1850）年以降、和刻本として数種刊行され、大体が付録「武事余記」（巻十一～巻十四）の部分を校訂し訓点を付したもので、大いに読まれた(17)。そもそも『聖武記』は主に清朝興隆期の皇帝、康熙、雍正、乾隆らの武功を記した一種の清代通史ではあるが、その実魏源が特に意を注いだのは、その付録「武事余記」である。その諸篇は魏源がアヘン戦争を教訓として西夷に対抗する為の軍事的方策を著したものである。当時の知識人は塩谷世弘が指摘する（塩谷世弘「『海国図志』を翻栞するの序」（嘉永七年六月））ようにその点をよく理解していたのである。

既に述べたように松陰も平戸・長崎遊学の折り、彼の『西遊日記』（『全集』第十巻）に拠れば嘉永三年九月十五日に葉山佐内から和刻本『聖武記付録』を借りて読み、翌十六日以降、葉山邸を訪れ十七日、十八日、十九日、二十四日、二十五日、十月十二日、十三日、十四日と読んでいる。『聖武記付録』は、全四冊から成り、『聖武記』第十一巻から第十四巻の「武事余記」を収めており、松陰はこの書物を通読はしているようである。

「武事余記」諸篇、特に巻十四「議武五篇」には、既に述べたようにアヘン戦争での敗北に鑑み、如何に外夷（欧米列強）に対抗すべきかが述べられている。その主張の中核を見ると、以下のようである。

> 夫れ外夷を制馭せんとせば、必ず先ず夷情を洞せよ。（「掌故考証」、『魏源全集』第三冊第517頁〔岳麓書社、2004年〕）

> 水戦の器火礮より烈なるは莫し。守礮有り、攻礮有り。其の製、西夷より精なるは莫く、其の用、西夷より習ふ莫し。其の之を内地に製せんよりは之を外夷に購せんには如かず。夷を以て夷を攻むるの上策なり。（「水守篇」、『魏源全集』第三冊第554頁）

> 西夷「礮を造るは礮を購するに如かず、舟を造るは舟を購するに如かず。…彼の長技を以て彼の長技を禦ぐ。此古より夷を以て夷を攻むるの上策なり。蓋し夷礮夷船但精良を求め皆工本を惜しまず。（「軍政篇」、『魏源全集』第三冊第559頁～560頁）

ここには西夷に軍事的に対抗する為には、夷情を摂取し、西夷の長技である大砲、軍艦を西夷から買って導入すべきことが述べられている。この諸篇を見てみると、それは『海国図志』の核心を為す、西夷に軍事的に、外交的に対抗する方策を述べた「籌海篇」の原型とでも言うべきものであることが判る。

長崎遊学期の松陰は西夷の大砲、軍艦が優れていることを理解し始めていていたようだが、日本に洋式の大砲、艦船を直ちに導入すべきであるとまでは考えていなかったように思われる。その証拠には、松陰が日記に書き留めた『聖武記』の語の中には洋式軍備に関するものが全くないのである。書きとどめたものには、次のようなものがある。

> 徒らに中華を侈張するを知り、未だ寰瀛の大なるを睹ず。」夫れ外夷を制馭するは必ず先づ夷情を洞ふ。今粤東の番舶は中国の書籍を購求し、夷字に転訳す、故に能く尽く中華の情勢を識る。若し内地も亦館を粤東に設け、専ら夷書夷史を訳せば、則殊俗敵情、虚実強弱、恩怨攻取、曲折を瞭悉す。於つて以て其の忌む所に中り、其の慕ふ所に投ずれば駕馭に於て豈に少補ならんや。」（「西遊日記」嘉永三年九月十七日、『全集』第十巻第35頁　原文は訓点附きの漢文、書き下しは筆者による）

前者は中華思想に泥むことへの批判であり、後者は外夷に対抗するには夷情を知る必要があるという魏源の外夷に対処する基本姿勢である。前者は松陰が日頃から感じていたことであり、後者は松陰が従来持っていた外夷への対処法であり、いずれも魏源の考えに共鳴し書きとどめたものであろう。

なお、その後もこの書物を読んでいたようで、書簡に「聖武記の春読了仕り候。相成り候はば夏秋冬も借用仕り度く候」（佐世八十郎宛　安政五年十二月十三日、『全集』第九巻第155頁）とある。

② 吉田松陰と『海国図志』

既に述べたように、魏源の撰述になる『海国図志』は日本に将来され、和刻本が刊行されると、多くの読者を得た。吉田松陰もその一人である。『海国図志』の和刻本が刊行された時には、魏源の名前は数年前に和刻本が刊行された『聖武記』の著者として多くの読者は知っていた。

松陰も既に『聖武記』を和刻本で読み、『海国図志』の撰述者魏源のことを知っていた。『海国図志』の和刻本の刊行の情報は人づてに短時間の内に日本全国に伝わったようで、和刻本第一号の「墨利加洲部」は嘉永七（1854）年四月に、二番目の「籌海篇」も同年七月には刊行されたが、松陰の読書記録「野山獄読書記」（『全集』第十一巻）を見ると、その年の十一月二十二日には山口の

萩の野山獄で松陰は初めて『海国図志』の和刻本を、どちらかはわからないが、読んでいる。その後も『海国図志』の和刻本を読んでいるが、それを「野山獄読書記」から拾ってみると次のようになる。

安政己卯（安政二〔1855〕年）二月　一、海国図志二冊　二十六日了

安政己卯四月　一、海国図志二　上下　二十一日了　（魏源著）

安政己卯五月　一、海国図志二　再閲十二日始

安政己卯六月　一、海国図志三四五六七八　合して四冊と為す　十一日より　十二日了

松陰が読書記録の中で最初に『海国図志』を読んだ嘉永七年十一月までに刊行された和刻本は中山伝右衛門校正の『海国図志墨利加洲部』と塩谷世弘、箕作阮甫校正の『海国図志籌海篇』の二種類のみあり、それ以降この読書記録の最後である安政己卯（二年）六月までには新たに和刻本は刊行されていない(18)。既に述べたように、松陰が初めて読んだ『海国図志』の和刻本は手懸かりがないので、この二種類のいずれを読んだかは判らないが、その後の安政己卯二月に読んだ「海国図志二冊」は『海国図志墨利加洲部』の最初に刊行された二冊であろう。なぜならば『海国図志籌海篇』であれば、題簽にも上下となっているので、二冊とだけは書かないはずである。安政己卯三月の「海国図志二　上下」は「上下」とあり、『海国図志籌海篇』である。次の「海国図志二」はその前の「海国図志二　上下」と同じ『海国図志籌海篇』を「再閲十二日始」であろう。最後の「海国図志三四五六七八」は『海国図志墨利加洲部』の後で刊行された第三巻以下第八巻までの全四冊である。以上のように、読書記録で見る限り松陰の読んだ『海国図志』は『海国図志墨利加洲部』と『海国図志籌海篇』の二種類であり、更に松陰の著作にも、「籌海篇を読む（安政二年五月四日）」（「野山獄文稿」〔『全集』第四巻第36頁～第37頁〕）と言う論稿があり、また「（松陰海国図識〔識は志の誤り〕亜墨利加）どうぞ借観仕り度く候。借観相成り候はば輿地全図・坤輿図識を付送願ひ奉り候」（兄杉梅太郎との往復書簡、嘉永七年十一月十五日復〔『全集』第八巻、第292頁〕）」とあり、松陰の著作にこの二種類以外、『海国図志』の篇は登場することがないので、松陰の読んだ『海国図志』の和刻本はこの二種類に限られると見てよいであろう。

松陰はなぜこの二種類の和刻本を選び読んだのか。まず「墨利加洲部」は当時砲艦外交で強圧的に日本に和親条約を結ばせたアメリカの事情が書かれている部分であり、松陰がアメリカに対抗する為にそこから情報を得る必要があり、読んだものと考えられる。また、「籌海篇」は、『聖武記』「武事余記」で示さ

れた西夷に対抗する方策を更に発展させたものと考えられ、松陰はその点に関心があり、読んだはずである。

松陰の読んだ『海国図志』はどんな形態の本であったか。当時和刻本も流通量が少なく、和解本の作者、広瀬達もその拠るところのテキストを探すのに苦労している[19]。松陰の兄宛書簡（嘉永七年十一月二十二日以後、『全集』第八巻、第298頁）に拠れば、「海国図誌（志の誤り）一巻先日拝用の分写了、却呈し奉り候。…勿論原本も草々に写したるものと相見え誤脱多く、殊に倒置の所之れありやに相考へられ候」とあるように、松陰が読んだ本は「原本も草々に写したるものと相見え誤脱多く」とあり、明らかに和刻本の原本ではなくその写本である。

それでは、松陰は『海国図志』をどのように読んだのか、松陰の著作で『海国図志』や魏源が登場する部分に拠って考察してみたい。

まず、松陰は『海国図志』を砲艦外交で日本に開国を強いたアメリカに対抗すべくアメリカ事情研究の為に読んでいる。安政五（1858）年十一月の「丁巳十月二十六日堀田備中守宅にて墨使申立の趣論駁條件」（「戊午幽室文稿」『全集』第五巻、第282頁、第286頁）を見ると、駐日公使ハリスが幕府への申立でアメリカは清国へ阿片を持ち込んだことはないと主張しているのに対して「吾れ又曾て清の魏源が籌海篇をみるに、阿片の交易暗夷（英国）のみならず、墨夷（アメリカ）の如きも亦少なしとせず。墨使の言断々信ずべからず」と反論する。確かに「籌海篇四議款」には「弥利堅国（アメリカ）…何以不聞補銀、蓋亦鴉片価内開除之数。英夷所運者印度鴉片、弥夷所運者都魯機（トルコ）鴉片（『魏源全集』第四冊第38頁　岳麓書社　2004年）」とあり、アメリカも清朝に阿片を持ち込み、貿易の赤字を補っていることが述べられており、松陰は『海国図志』に基づいてハリスの主張に論駁しているのである。

次に歐夷の優れた制度を日本でも活用しようとする。例えば、アメリカの服役者矯正制度である。松陰は、野山獄入獄八ヶ月後の安政二年六月に「福堂策」（「野山雑著」所収『全集』第二巻第301頁）なる小論文を発表している。それには、後魏の孝文帝が言った「智者は囹圄（れいご、牢獄）を以て福堂とす」は、道理にはかなうが実態はそう簡単なものではないと、「余獄に在ること久し、親しく囚徒の情態を観察するに、久しく獄に在りて悪術を工む者ありて、善思を生ずる者を見ず。然らば、滞囚は決して善治に非ず。…但し是れは獄中教なき者を以て云ふのみ。若し教えある時は何ぞ其れ善思を生ぜざるを憂へんや。曾て米利幹（アメリカ）の獄制を見るに、往者は一たび獄に入れば、多くは其の悪益々

甚しかりしが、近時は善書ありて教導する故に、獄に入る時は更に転じて善人となると云ふ。是くの如しにして始めて福堂と謂ふべし」と言う。「曾て米利幹の獄制を見る」とあるが、それは『海国図志』「墨利加洲部　弥利堅国総記上」（和刻本では『海国図志』「墨利加洲部」巻一第35葉~第36葉）に「新国立仁会以済在監之犯。昔監内弊端甚衆、由監出之犯、為悪甚于前、由是会中遂改各監之規模、分布二十六部監内、分善悪両途、善者居寛広之所、悪者居浅狭之所、俱不能相見。…併有善書、于礼拝日使誦。故今之犯法収監者、出監后即痛改前非（『魏源全集』第六冊第1617頁）」に拠る。松陰は世界を我がものとせんとする欧夷の魂胆は憎むが、彼らの優れたものは取り入れようとする柔軟性を持っている。また松陰は『海国図志』以外の夷情の書から西洋の社会福祉制度を見つけ、「何分にも四窮（寡婦、鰥夫、孤児、子のない老人）は王政の先んずる所なれば、好制度を設け各々其の所を得させ度きものに御座候。西洋夷狄にさへ貧院・病院・幼院などの設ありて、下を恵むの道を行ふに、目出度き大養徳御国において却って此の制度なき、豈に大缺典ならずや」（兄杉梅太郎宛　嘉永六年九月十四日、『全集』第八巻第214頁）とこの制度を日本でも採用すべきことを主張する。

また、松陰は「籌海篇」では魏源の説の問題点を正しく兵学者の視点から批判する。先ず「籌海篇を読む」（安政二年五月四日「野山獄文稿」『全集』第四巻第36~37頁）では、「清の魏默深の籌海篇は守を議し、戦を議し、款を議し、鑿々としてに中る。清をして尽く之れを用ひしめば、固より以て英寇を制し、魯拂を馭するに足らん」と一応評価しながら、広西の民変（太平天国）が拡大していることを憂慮し、「則ち清の宜しく慮と為すべき所は、外夷に在らずして、内民に在るなり」「噫、民は内なり、夷は外なり。外を謀りて内を遺るる者は凶なり」と民生を顧みないでは、夷狄に対抗できないことを批判している。

また、「甲寅蘭頓評判記を読む」（安政二年七月「野山獄文稿」『全集』第四巻第51頁～第52頁）でも「籌海篇」の論点を批判している。「甲寅蘭頓評判記」は、魏源の著作として存在せず、松陰が「籌海篇」の一部をそう名付けたものと思われる。ここで言う「蘭頓」は「英吉利、又曰英倫、又曰蘭頓」（『海国図志』「英吉利国総記」）とあるように、イギリスのことを指す。「魯（露）と墨（米）と拂（仏）とは、皆暗（英）に悪し、宜しく収めて以て水陸の援と為すべし」と言う引用文から見ると、それは「籌海篇三　議戦」にある、英国とフランス、米国、ロシアの対立即ち西夷同士の敵対関係を利用して清国最大の敵イギリスを牽制する方が示されている部分[20]である。松陰は魏源を「漢土人の翹楚

(高く抜きん出た人物)」と讃えながらも、ここの「夷を以て夷を攻む」策は「利を見て義を見ず。苟も利ならば敵讐も同盟となり、苟も害ならば、同盟も敵讐」となる夷狄には、常に通用するわけではないと、「漢土の人、古より外国の事に於て茫然として講ぜず、反って臆を以て之を断ず」即ち中国人が中華思想に毒され、国際情勢を冷徹に理解できない弊害を批判している。

以上の述べたように、松陰の『海国図志』の受容には二つの面がある。即ち一つは夷情を知りそれを摂取することであり、この点は同時代の知識人と共通している。しかし、もう一つの面は松陰独特なものである。それは、改革者魏源の境遇には共感しながらも、一方で兵学者として、魏源の対夷狄策の不備な面、例えば未だ華夷秩序の枠組みの中にあるために夷狄の実態を見誤る点などを冷静に批判的に捉えていることである。この点は師佐久間象山の魏源の『聖武記』、『海国図志』に対する態度と相通じる点がある[21]。松陰は『海国図志』を読んだ時点で、既に師象山の影響の下、彼の夷狄に対抗する策は既に「籌海篇」の基本構想「1外夷を制するために夷情を知り尽くす、2西洋の長技(軍艦、火器、養兵練兵法)の導入、3造船所、武器工場の設置による西洋技術の導入」以上には達していて、却って魏源の策の不備が気になったのであろう。

5　結び

兵学者として出発した吉田松陰は、夷情(西洋事情)を積極的に学びながら、欧米列強(歐夷)に対抗し如何にして日本を守るかを考究した。その中で生涯の師佐久間象山と出会い、西洋兵法、西洋砲術を学びその優位性を認め、欧米列強に対抗するには洋式軍艦、大砲、更にはその技術の導入が不可欠であることを確信した。松陰はまた、同様に象山の影響により鎖国を否定し世界に雄飛しようとしたが、アメリカの砲艦外交による屈辱的開国は彼を攘夷に走らせる。そのような時松陰は『海国図志』を読み、単に夷情を摂取するのみならず、改革者魏源の境遇には共感しながらも、一方で兵学者として、魏源の西洋認識の不備な面、中華思想に泥むなどを冷静に批判的に捉えたのである。

注

(1) 越中高岡の医師佐渡養順家の蔵書には、和刻本の中山伝右衛門校正『海国図志』「墨利加洲部」をはじめ、塩谷世弘、箕作阮甫校正『海国図志』「籌海篇」、『海国図

志』「普魯社国」、『海国図志』「俄羅斯国部」、『海国図志』「英吉利国部」や、正木仙八、広瀬達の和解本数種類があり、地方の知識人にも『海国図志』が読まれていたことがわかる。宮地正人「幕末・明治前期における歴史認識の構造」(『歴史認識 日本近代思想大系』、岩波書店、1991年 第521頁)

(2) 本稿では吉田松陰の伝記事項は原則として『普及版吉田松陰全集』第一巻「吉田松陰年譜」と海原徹『吉田松陰　ミネルヴァ日本評伝選』(ミネルヴァ書房、2003年)とに拠る。

(3) 本稿では佐久間象山の伝記事項は原則として「佐久間象山先生年譜」(信濃教育会編『象山全集』第一巻、信濃毎日新聞社、1934年)に拠る。

(4) 陳其泰、劉蘭肖『魏源評伝』(南京大学出版社、2005年) 第二章「学術交往」第124頁。

(5) 岩下哲典『江戸の海外情報ネットワーク (歴史文化ライブラリー)』(吉川弘文館、2006年)「アヘン戦争情報を捕捉せよ」、「アヘン戦争の情報と危機感」。真栄平房照「近世日本における海外情報と琉球の位置」(『思想』796、1990年)

(6) 『概説日本思想史』第18章「幕末の群像」第1節「アヘン戦争の衝撃」(ミネルヴァ書房　2005年)

(7) 「西遊日記」嘉永三年 (『全集』第十巻、第39頁～第40頁)。

(8) 塩谷世弘 (宕陰)「『英吉利広述』の後に書く」(和刻本『海国図志』「英吉利国部」跋)。

(9) 大庭脩『漢籍輸入の文化史』(研文出版、1997年) 第326頁。

(10) 阿川修三「『海国図志』と日本　2　―和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について」(文教大学言語文化研究所紀要『言語と文化』第24号、2012年)。

(11) 海原徹『吉田松陰』第一章「松陰吉田寅次郎の誕生」第33頁～第34頁。

(12) 『西遊日記』(『全集』第10巻、第35頁～第90頁)。

(13) 「佐久間象山先生年譜」(『象山全集』第一巻、第38頁、第45頁、第46頁、第49頁、第50頁、第52頁、第54頁、第55頁、第57頁)。

(14) 「兄杉梅太郎宛書簡」嘉永六年九月十五日 (『全集』第八巻第216頁)、「叔父玉木文之進宛　書簡」嘉永六年九月十日 (『全集』第八巻第205頁)。

(15) 吉田俊純『水戸学と明治維新』(吉川弘文館、2003年) 第192頁。

(16) 宮地哉恵子「幕末期における海外情報の受容過程―蘭書の輸入と受容形態をめぐって」(『参考書誌研究』第39号、1991年)

(17) 『聖武記』の和刻本には、この『聖武記附録』(巻十一～十四　武事余記、嘉永三〔1850年〕年) の外に、鷲津監校『聖武記採要』三冊 (巻十四　武事余記議武五篇、

嘉永三〔1850年〕年)、山中信古校『聖武記抜萃』四冊(安政三〔1856〕年)などがある。神田信夫「『聖武記』雑考」(『東方学会創立四十周年記念東方学論集』、1987年)、大庭脩『漢籍輸入の文化史』(文出版、1997年)第327頁。

(18)『海国図志』の和刻本については、以下前掲阿川論文に拠る。

(19)『海国図志』は清人林則徐の撰する所、舶載極めて少く、秘府に深蔵さる。人皆一見を思ふも、得る能はず。可行(広瀬達の名)独り之を偸見するを得。手抄する有り。乃ち摘訳す(横山湖山『亜墨利加総記』跋、嘉永七年肇春〔広瀬達『亜墨利加総記』、嘉永甲寅(七年)初夏新刊〕、原文は漢文。書き下し文は筆者による)。

(20)『魏源全集』第一冊第25頁～26頁　岳麓書社　2004年。

(21)新村容子「佐久間象山と魏源」(『文化共生学研究』第6号、2008年)によれば、象山は心情的には魏源を「真に海外の同志と言うべし」と言い共感しているが、象山の西洋認識は魏源より深く、西洋の軍備の背後に科学が存在することを理解し、また華夷思想の枠組みのとらえ直しに一歩踏み出していて、魏源との思想的な相違は顕著である。

(文教大学)